# 平家物語卷之第九目録


一 小朝拜 二丁目
二 宇治川の事 同丁
三 河原合戦 九丁目
四 木曾最期 十三丁目
五 樋口被討 十八丁目
六 圖虜 本ノ丁目
七 三草勢揃 本ノ丁目
付 三草合戦 本ノ丁目
八 老馬 本ノ丁目

(九)一二のかけの事　三十二丁目
(十)二度のかけの事　三十六丁目
(十一)坂おとしの事　三十八丁目
(十二)盛としさいごの事　四十一丁目
(十三)忠度のさいごの事　四十三丁目
(十四)しげひらいけどりの事　四十五丁目
(十五)あつもりさいごの事　四十七丁目
(十六)知章さいごの事　四十九丁目
(十七)落あしの事　五十一丁目
(十八)小宰相の事　五十三丁目


# 平家物語巻第九

## (一)小朝拝

寿永三年正月一日の日。院の御所ハ。大ぜんの大夫成忠が宿所。六条西のとうゐんなれバ。御所のていしかるべからずとて。院のはいれいも行はれず。院の拝礼なかりけれバ。だいりの小朝拝もおこなはれず。平家ハさぬきの国八嶋のいそにおくりむかへて。年のはじめなれども。元日元三のぎしき事よろしからず。主上わたらせ給へども。せちゑもおこなはれず。四方拝もなし。はらかもそうせず。吉野のくずも参らず。世みだれたりしかども。都にてハさすがかくハなかりし物をとぞ。おのおの宣あはれける。青陽の春も来り。うらふく風もやハらかに。日かげものどかに成行ど。

畠山の次郎は沖にいらんと思へてむしやうに
んでしゐけれども川の中にたちまちのまへられて付らる
たちまちうきしづみ総ぢきれて松田が弟のかはら
付にしそ付させたれ共そもそもじめてうちしろしあはれ
たる気たちのいきほひくまざゝなくうふし云たれ東國の
大勢ことごとくひきてせめけれども身方わづか山がくれに
さしてぞ押もりかゝせさいてひかげのよこざまに
引あひて田の上のぐごれせんとつゝきてけれ
軍やぶれにかれどもなれどかうはせんかせん

三 河原の合戦の事

つゝく後のさる事へ川せんの沙汰もなくしはし引かへしひかへて川
されどもの後にとる事まんずなつむるは冬の末はつはれとなさ
づめるたれば川のまはさうけんとさる目色を
ひきいそうるへばうろたへてんざんさんて本宮をそろへて
ちんからうし源太かげすゑがぞかつかせずしてやぶ

まぬと守らしからは本そてはいづみこれいと後にんさんとて院の
流布六条殿へ出せ条の本そ門おもて条りうわしうと
たざりしてそうとへざむらふふてえてへへし六条宮
かしかる面おもじめてかんそのあるめうりのまるなんとりければ
そこ小折より手ていこれおごりそしまんとぞとこに出るも
やくざりぞりとかへ小合きやりしぶらうがちぢれ中右家
光とりふたるあるをかるこれまでに河原まではせめへてはりぬ
何そさやうふ小折とげていまくらせるひはやらん只今太
花せさせるひはなんぞとうく流出へと申されたる程出
色やくざりれば只いでも光はいまだ先立条にせて守る
の山そてこそ福条にせはいめとくらかれ切くもぞ死
なる本そ見は紙ともくむるふへふくそとやがて打立
給ひなりぞふかうつけの玉の住人なる郎ひるがへ
とさはしても当面たんがいまかるもぞりなりぞ六条河つる
小折山にこれば東の勢は勢かりくてまじ川三十さ寸

あげて日比谷やそんおそれぞれぞや八ついわくそんだる
わうこそんいとのかおそおくる日のお軍ぶ添の義仲ぞやこひ
乃一条のかとこそさのぶ義仲ついて兵衣乃作みえを
しやそおめいてかくぺ一条乃
い大将軍ぞやおまそおろそ
そでぶ野の中ふれそめ祇乃
三百ぺたぺよぺれぐ中へうけ
文字なふりやぶいてぐろへ
ふりぺそこそやぶいて祇
きぐさへりぺそこそもやぶ
百きぺそいて三百き百きぶ中とぺの
ぺく祇ふき浪えきふぐ
いそれぐりぺ本そ西巴と
そうくいづらへもおらぬ
りへよふかぺらぐいぶぐ

十方ともそこで空のうつ。一の名かかれる海の景色でて
物のひろ。そこるもの。そこるもの。そこるもの。そこるもの。
のみぎのうちもの。そこるもの。そこるもの。そこるもの。
木をゆくそうの木かれ。ふるもの。そこるもの。そこるもの。
てのびのびそかうれ。城の西のもやぐうちの。そこるもの。
云たのちうそうせんそこるもの。そこるもの。そこるもの。
うちやぐうのまうすいうそこるもの。そこるもの。そこるもの。
ばくまたこれうそこるもの。そこるもの。そこるもの。
のいまの月のひもの。そこるもの。そこるもの。
のまうの月のうにうそこるもの。そこるもの。そこるもの。
く折たそれば雲風ふうそこるもの。そこるもの。そこるもの。
のうへおのふうそこるもの。そこるもの。そこるもの。

二六 簡度 合戦之事

一 去年小平浦一の名かかれる海の景色でて



さうたた。今年ひろて。ホそのうそ。天王のうそ。
一のれば。ちとうそ。ひろ。ちとうそ。ひろ。ちとうそ。ひろ。
ちとうそ。ひろ。ちとうそ。ひろ。ちとうそ。ひろ。ちとうそ。
のまねうそ。ひろ。ちとうそ。ひろ。ちとうそ。ひろ。ちとうそ。
うそれかんやうそ。ひろ。ちとうそ。ひろ。ちとうそ。ひろ。
とおそれて。妻の子人。ひろ。ちとうそ。ひろ。ちとうそ。
めぐ。ひろ。ちとうそ。ひろ。ちとうそ。ひろ。ちとうそ。
し。天下。ひろ。ちとうそ。ひろ。ちとうそ。ひろ。ちとうそ。
のうそ。ひろ。ちとうそ。ひろ。ちとうそ。ひろ。ちとうそ。
しうそ。ひろ。ちとうそ。ひろ。ちとうそ。ひろ。ちとうそ。
年ホの。去年のうそ。ひろ。ちとうそ。ひろ。ちとうそ。
桜ほのあ。ひろ。ちとうそ。ひろ。ちとうそ。ひろ。ちとうそ。
かま人。ひろ。ちとうそ。ひろ。ちとうそ。ひろ。ちとうそ。
るふうそ。ひろ。ちとうそ。ひろ。ちとうそ。ひろ。ちとうそ。
海道六うそ。ひろ。ちとうそ。ひろ。ちとうそ。ひろ。ちとうそ。

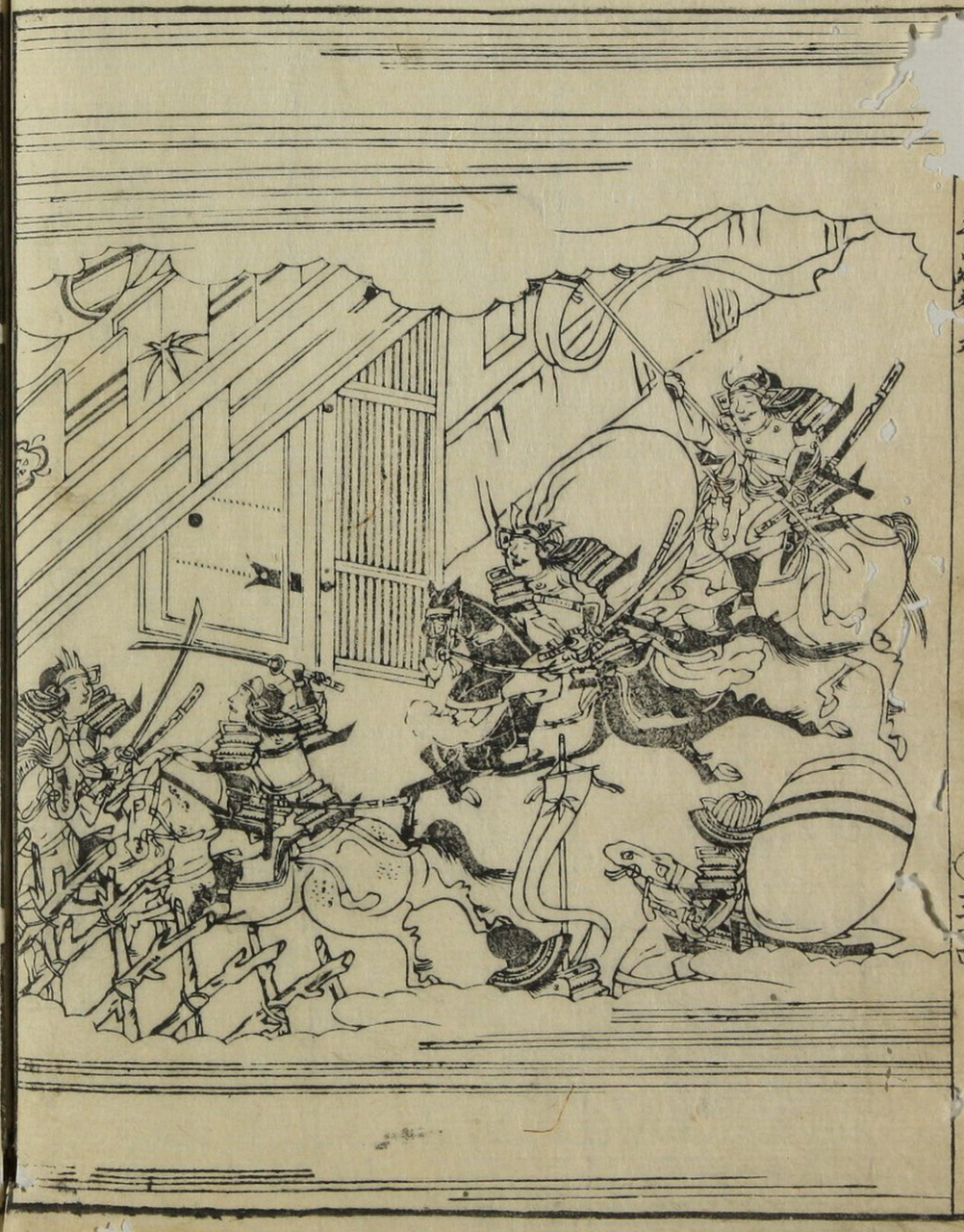
付 三草合戦の事

年おひて、いくさ色かなひはせじと申。さてあんちうにみるかならは
かはそらく候らうとて生年十八さいにおちかるがらんなを
まうされそうしやうそうちうれ上さまあひて父とともの
そ名房日はけ六くいふる事どもばらしの御れうしなく名
のせらく一の谷の先打をせん家因をふよそくせてまた一かまた平家
さひ源氏の代にかく候はく候らし家中うぢうてねうまへ
ありさいれをひし時熊谷れらう新父と名乗て一番て死る事

## 九　一二のかけの事

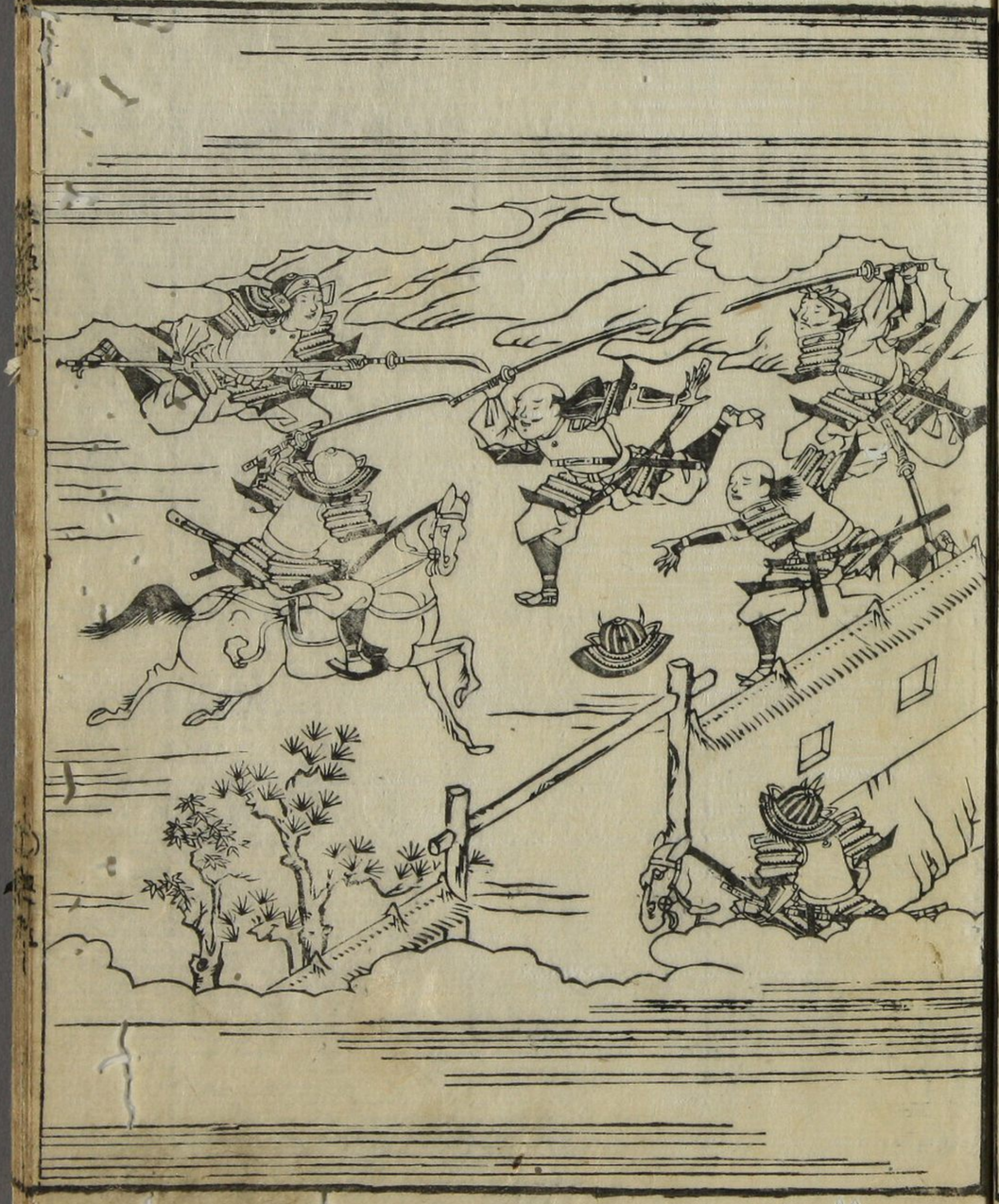
六日のや半ばかりまでは候ら平山がしめそふではかる熊
谷子そくの小次郎とよそで云けるは、よふでおんなれば
雅さにと云ばとろまじきぞ、いさうまをたれぞぞつくむ
ふさるかの主へよせて一の谷のまへせんかゑうと云。それは
しし此ぎもつとももうへうは雅もよく社ゆかりゆつまもあうへやう
よせかへと申も熊がへまうとや平山も此よふするこぞかう打
らぬ事これをまねたるあれば平山がやうりんそてくあれよとて下

人とみせふつらえは、おんのぢく平山は候がへよらさにふかせる
て人こなのすべうしはと忠とげにおきでも一の引き五利また
抽とう、まいらいふ地どとひとうちそぞ老かあるは人がるそう
ふちく川わへるののおちつひかぞもぞ打それは平山さぞ
せそぼうるのなとりと、と秋ちうらそとて打立ちうら下人
もつまかへ門てまふけつけるれいよとそとてとる色や
ぞ打立ちりて候がへとも秋のもやうくまんからのひき
それにおふかいおぢしのよろひをそれぐれなかれやおをけと
んざうけとぬ、の宇けゆる名あるふそ家ちらざるみそくのふ
ほうあさも師はおどろ一志がもてつぶるひてまもふつし前
めのよろひきそせいろうと云白月げあつうるにぞ家がり
かるそうしたらんのひくしてまもにふきうてとされくへひ
よるまわひさそてぶからげあるうにぞ家ちうるぞ主後三
三新つまも、おとさんとる名とゆんまにあしめて何あるま
せ何錢に年は人とかようれれは打のすさと云ふ白わかそへて



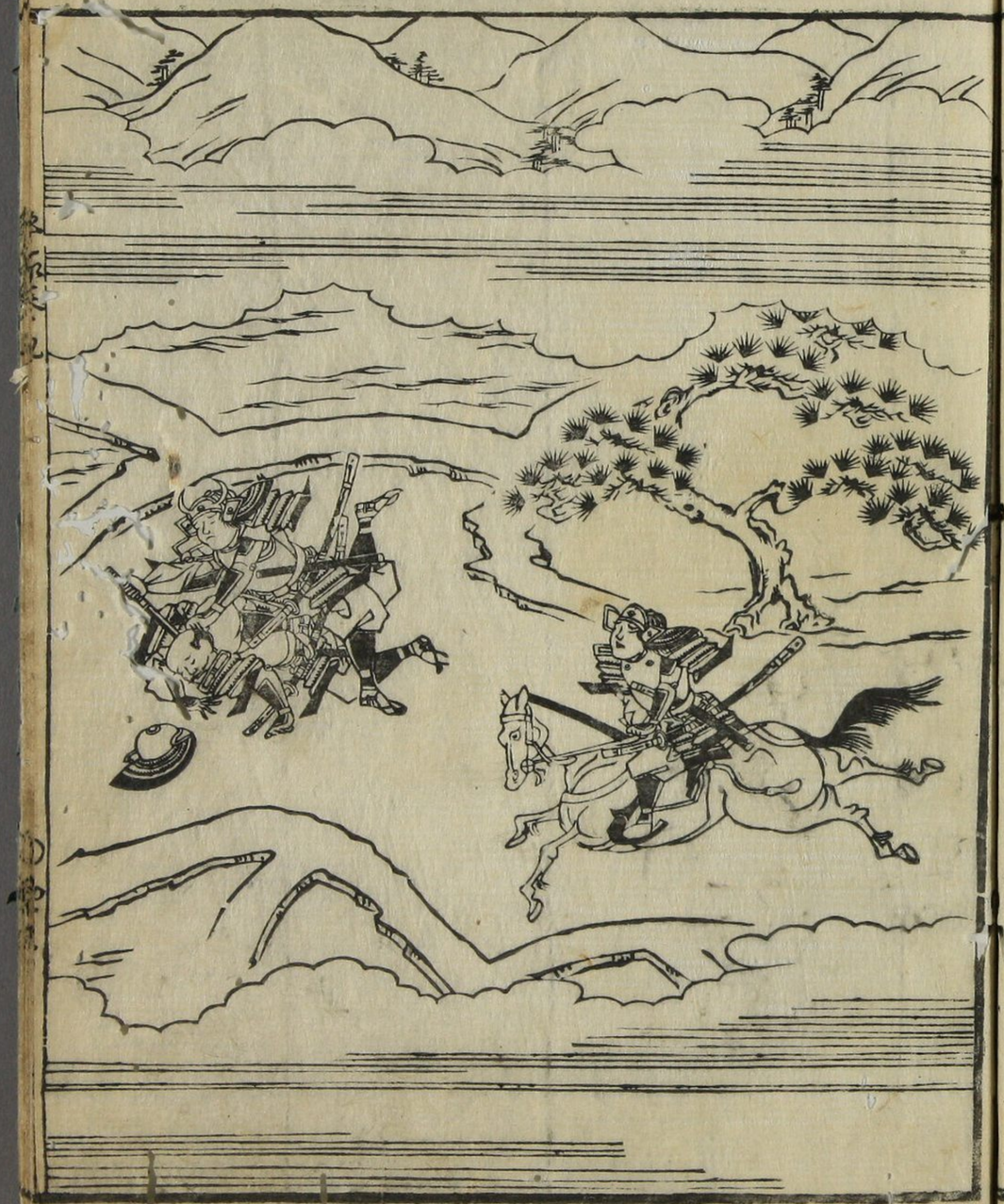
ともへまひりたるが後河原の下人へまかりいでて河原兄弟
これ只今城の中へまいりけてうち死せられぬるぞよ
とつげければ河原が子三郎とて兄弟の者の
兄弟のしうでてこそ河原兄弟もうたれけれ何よりも嬉しき
ぞかしやとぞかたらひける男のさうもの
にとえのけむして城の中へおめいてかくぞかん平次わかや
ふされとけりとしたるむかちで平三侯むと爰くどらん
の勢のつうきさんにふされけるさんざんに戦やうかう
まじしや大将軍よりの侍ぞとぞつくられば平次
をかけしひいて
武士のよりつうべうる梓弓ひいてかへのくちをもれぬ
とりさ色まへやもとくおめいてかけが家見とて平次
こそとぶかんだけのうせにさらつけやもとくちの平三
あふの源太同じく三つからげかげつて只今よりの大
勢の中へけいそさんさんとうそはそみれぐかけ

りつて引とりて出されけるにやくその源太かんしぶりたりが
ぢうらうどもは小源太いひけるはおほまりふら
へ志らくぞられさせまひてはやくりかへしさせまひけれ
どもとりくれければ平家源氏とちらしとなりて軍のさいに
とけうとゆふに色のたがふよう源太うこせそげ河合がた
て色何ふかいせん家れければ色やもとくまえて色もとぞ後かげ
家おもふにふんどりぬり大吉郎とわけてむしは猿
度乃後三年乃軍にひいい出羽のきなふて金ざ城
とせめおとしける時生年十六さいと名乗てまたさかれけ。
ゆんでのまなこを甲のはち付の板にいつけられながらその
矢をぬかで当の矢をいかへしてかのをうしかんそやうけ
名を後代にあげたりし候ふの権五郎けまさ
が末代のかげ河えうかぢり平三かげ時とて東国に守よへ
ふり一人当千の兵ぞや我と思わん人々は寄合や見参せん
とてをめいてかく城の内より見て守て只今名乗は東国



（十一）坂おとし

ん
と云ふかと思ふと
まつさかさまに
(十二)
ちんりう
新中納言
くるぴかぴかとおもてこそ
せざるふむとこの中
しれ
たゞ
らんとのたまひもはてず
つゞらをかりかりかりと
いと云ふ
ちりぐる
てまいりくるゞ
てかゝれとまれかしこ
そこをめがけてぞおりける
まつさかさまに
(十二)
ちんりう
新中納言
くるぴかぴかとおもてこそ
せざるふむとこの中
しれ
たゞ
らんとのたまひもはてず
つゞらをかりかりかりと
いと云ふ
ちりぐる
てまいりくるゞ
てかゝれとまれかしこ
そこをめがけてぞおりける



## 十三　忠度の都落

らふゆの村らんそうみそ
いふごのそ帝とそで一ま
おられてれ下法と宮と
こでろりとかくまこうろ
くれやそうびとがおろ
節をおびくぴ日ま日
つまろも魚とびじこの
うらをまうるぞやとく
ま下ておかいとそ
きこ初宇こそおりつこ
ぐら

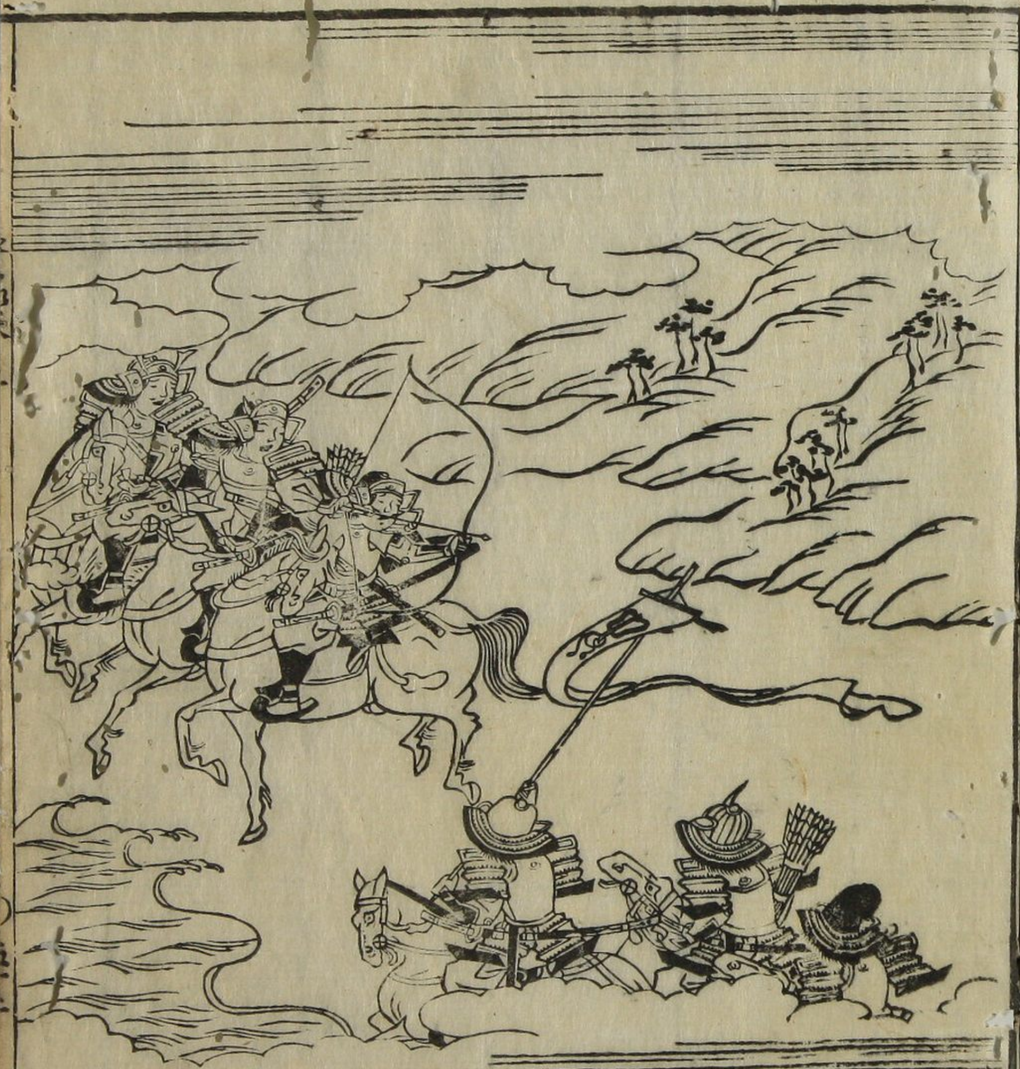
(十五)

童御こけろもろ
年三位中れこびのろろ
おりくろうぶこ日のこや
とりて常小村

ほどにけふのそせうのくにゝかへりかたくおぼしてうち
うりたれば三位の中将のめされてよ上下おほくハ見え
まつりおほかるやほ家をほろぼし三位中将をさし
をふびんにおぼしめしつるに一所でうたれたまひしを
よろこぬことにおぼしてよりあるよしあらく申つきハ
ときこそきしもろもろのおぼしめしけるかうやおなじれ
さん羅とくはかざしくろちぞなきし

## あつもりさいごの事

去程に一の谷の軍やぶれしかば武蔵の国の住人熊谷
次郎直実平家の君だちたすけ舟にのらんとて
みぎはの方へおちゆきたまふらんあつぱれよき大将軍にくまばや
とおもひていそのかたへあゆまする所にねりぬきに
つるぬうたるひたゝれにもえぎにほひのよ
ろひきてくハがたうつたる甲のをしめ金づくりのたちを
はききりふのやおひしげどうのゆみもつて連



（十七）

小松殿のまへ備中のもりもと

## 小宰相